

## ■ 「すでに米利上げサイクルは終了」との見方が広がる

前回更新分の本欄で「目下の注目は兎にも角にも米長期金利の行方」と述べたが、それ以降の米長期金利はにわかに低下傾向を強めており、結果、ドルの上値はやや押さえられがちになっている。

先週6日に発表された9月の米雇用統計において、勤労者数の伸びがパート勤務の増加によるものと判明したことや平均時給の伸びが予想を下回ったこと、失業率が若干アップしたことなどがその一因と見られる。この9月、10月はコロナ禍で免除されていた学生ローンの返済が再開したことによってパートで働く人が増えやすいということもあろう。

また、今週の週明け以降、米連邦準備理事会（FRB）関係者からハト派寄りの発言が相次ぎ飛び出してきていることも米長期金利の低下に一役買っている。極めつけは、10日にアトランタ連銀のボスティック総裁から発せられた「金利をこれ以上引き上げる必要があるとは思わない」との一言がインパクト大であった。

少し振り返ると、9月に行われた米連邦公開市場委員会（FOMC）において参加メンバーらが示した金利見通し（ドット・プロット）では「年内あと1回の利上げ」と予想する向きが12名だった一方で「利上げ打ち止め」の予想も7名あった。もともと、利上げサイクルの終了を予想する向きも相当数あったわけである。

そして、いまや市場では「米利上げサイクルはすでに終了も当面は高金利の状態が続く」との見通しが幅を利かせるようになってきている。実際、CMEのFedWatchツールによると、

次回のFOMCで現行政策を据え置くと見る向きは9割を超えるまでに増えてきた。

結果、昨日（11日）の米10年債利回りは4.5%台まで低下。戻りを試す動きとなっているユーロ/ドルは10日に21日移動平均線を終値で上抜け、足元では5月安値の1.0635ドル処や、7月高値から10月安値までの下げに対する23.4%戻し=1.0650ドル処を意識した動きとなっている（左図参照）。

なお、週足では62週移動平均線を先週の終値から上抜けてきており、想定以上に強めの展開となっている。むしろ、これはドル安の結果であり、ユーロの上値余地自体がそれほど大きいとは考え難い。既知のとおり、独連邦統計庁が先週9日に発表した8月の独鉱工業生産指数は前月比0.2%の低下と市場予想を下回り、4カ月連続の低下となった。

また、国際通貨基金（IMF）が10日に示した『世界経済見通し』では、ユーロ圏の成長見通しが23年と24年の双方で下方修正され、ドイツの23年成長見通しについてはマイナス0.5%という厳しきである。本日のNY時間に発表される9月の米消費者物価指数（CPI）の結果次第ということにはなるのだが、仮にユーロ/ドルが1.0650ドル処を明確に上抜けてきた場合には、差し当たり1.0700ドル処が意識されやすくなると見ておきたい。

一方、ドル/円については米長期金利低下で上値が押さえられがちとなっているものの、下値については21日道平均線（21日線）のサポートが今のところは利いている。執筆時の21日線は148.69円処に位置しており、当座は同線を明確に下抜けるかどうかを見定めることが肝要と言えよう。クリアに下抜ければ7月下旬以来であり、相応のインパクトはある。

ただ、前回も述べたように、いまだドル/円は手掛けにくい状態にあると言え、やはりトレードの中心はユーロ/ドルということになってくる。目下の戻り歩調が一巡した後の反落を狙うというのも一法と個人的には考える。

（10月12日 10:00）

